

医療情報がもたらす病院建築への変革

情報中心から患者中心の施設へ ～東京臨海病院の場合～

岡田世郎 佐藤総合計画 取締役事務所長

東京臨海病院は日本私立学校振興・共済事業団の直営病院であった下谷病院が老朽化、狭隘化となったため新たに江戸川区の臨海地区に移転新築したものである。当病院の医療提供機能は「共済組合加入者のための医療機関」と「地域住民への良質な医療の提供」との二つの視点に基づいており、そのため健診機能を中心とした健康医学センターも併設されている。病気になる前の予防医学の機能を持たせている点では医療情報の果たす役割が大きい。

また、当病院の特徴のひとつは病棟の看護単位の構成を通常見られる1フロア当たり2看護単位を3看護単位で構成して看護サービス機能をより分散化していることである。当病院のような病院機能と健診機能の「集合化」あるいは病棟の看護単位の「分散化」は患者中心のサービスを考えるうえでのキーワードになるのではないと思われる。

患者サービスの「集合化」と「分散化」を可能にしている大きな要因のひとつが医療情報化の発展であるとの仮定のもとに事例として東京臨海病院の紹介をした。